

「海の恵み」について考えるための10冊

地球上のあらゆる命の母たる「海」。この、あまりにも深く大きく計り知れない存在について考察を巡らせるには、書物の海で迷ってみるのもまた一興。航海の手がかりとしていただきたい10冊を選びました。

ウエカツの
目からウロコの魚料理



Number 1
上田勝彦著
東京書籍／2014年
[漁業・魚食]

魚料理は面倒くさいし、難しい。そんな声に、「魚の伝道師」にして現職の水産庁職員・ウエカツこと上田勝彦が立ち上がった。魚の個性を見極めれば、調味料や煮炊きの仕組みの変数で料理の可能性は無限に広がる。本を閉じたら市場へ出かけ、魚を買って捌(さば)いてみよう。海が、自然が、命が、まるごと味わえるはずだ。

海の生物多様性



Number 2
大森 信、ボイス・ソーンミラー 著
築地書館／2006年
[環境問題]

磯浜やさんご礁から深海に至るさまざまな生態系、海洋汚染の原因や仕組み、生態系の保全技術と国家・行政による各種の取り組みまで、分野を超えた広いテーマで、海に生きる生物と、海そのものの環境を取り巻く諸問題を解説する。細分化された内容の書籍が多い領域だけに、一般や学生向けの入門書としてもおすすめしたい。

海獣の子供(全5巻)



Number 3
五十嵐大介著
小学館／2007～12年
[創作・エッセイ]

世界各地で魚が光を放って消える不思議な現象が発生。秘密の鍵をにぎるのは、ジュゴンに育てられたふたりの少年。五感が震えるような、圧倒的な海や生物の描写が続いた最後に「一番大切な約束は、言葉では伝わらない」と語られるとき、生命を生み出した海の、底知れぬ深さと広大さを、まざまざと実感することになるだろう。

日本の深海



Number 4
瀧澤美奈子著
講談社ブルーバックス／2013年
[海洋資源]

プレートテクトニクス、今号でも取り上げた海底資源や海洋深層水、最近注目を集めている深海の生物の話題や、東日本大震災の震源域の調査まで、気鋭の科学ジャーナリストが現在の深海の話題をわかりやすくピックアップ。陸上と深海がいかにつながっているかもわかる。海の大部分の面積を占めるといふ深海を知るのに、最適の一冊だ。

海はどうして
できたのか
壮大なスケールの地球進化史



Number 5
藤岡換太郎著
講談社ブルーバックス／2013年
[海の科学]

地球がオギャアと生まれて46億年。海にもいろいろあった。原始海洋から猛毒の地獄海時代を経て、海底地滑り、海洋無酸素事件まで。陸や大気や生物と共振しながら、押し寄せる難難辛苦を乗り越えてきたのが、現在の「命の母」たる海だ。その「僥倖(ぎょうこう)」のひとつひとつに、驚きと畏敬の念が湧き起こる。



海上の道



Number 6
柳田國男著
岩波文庫／1978年
[歴史・民俗・民族・人類]

稲作は沖縄・奄美の島づたいに、黒潮＝海上の道を北上して日本に伝わった、という壮大な仮説を唱えた、柳田最晩年の到達点。交通路としての海的重要性を説く。南洋から流れ着いたヤシの実を愛知県の伊良湖岬で発見し、柳田は海上の道の存在を実感した。この話を柳田から聞いた島崎藤村が詩「椰子の実」を書いたというエピソードは有名。

南洋通信



Number 7
中島 敦著
中公文庫／2001年
[創作・エッセイ]

「李陵」や「山月記」などで知られる作家・中島敦は、戦時中の1941年、南洋庁の官僚として、当時日本の委任統治領だったパラオに赴任した。本書には、赴任先に題材をとった「南島譚」「環礁」と家族や友人に宛てた書簡を収録。太平洋の島や海、気だるくも官能的な空気が伝わってくる。書簡からは、中島の優しい人となりが見られる。

近大マグロの奇跡
完全養殖成功への32年



Number 8
林 宏樹著
新潮文庫／2013年
[漁業・魚食]

絶滅の危機まで囁かれたクロマグロを、人工孵化した魚からさらに人工孵化させる「完全養殖」に導いた近畿大学水産研究所。その偉業は今や広く知られることとなったが、2002年の成功に至るまでの苦闘は、凡百の成功秘話をはるかに凌駕する壮絶さだった。環境や資源といった現代社会の問題も照らし出す、感動のルポ。

苦海浄土
わが水俣病



Number 9
石牟礼道子著
講談社文庫／2004年(新装版)
[環境問題]

豊かさを求めた人間の経済活動の結果、海とそこに生きる人々に多大な犠牲を出した水俣病。その発症地域に育った著者は、患者とその家族が、病と壮絶な闘いを続けながらも尊厳を失わずに生きる様を鮮烈に描いた。人間の驕りが、やがては人間の生命の危機となって返ってくることを忘れないためにも、いつまでも読み継がれるべき作品。

海の帝国
アジアをどう考えるか



Number 10
白石 隆著
中公新書／2000年
[歴史・政治・経済]

シンガポールのホテルに冠された名前でも知られるイギリス人、ラッフルズ。彼に象徴されるのは、19世紀初頭のイギリスによるアジアの地域秩序構築。それから現代にいたるまでの約200年を射程に入れ、海によってつながったアジアという地域をひとつの有機的システムと捉えるユニークな視点で、その秩序構築と形成について考察する。